

# 文展の子供

倉 橋 生

今秋の文展には子供を描いた繪に注目し値するものが可なりある。昨年は取り立て、言ふ程のものもなく、一回休んだが、今年は例年の此の記事を續けることが出来る。

觀てあるく部室の順を離れて、私の印象に一番残つて居るのは、菊澤武江氏の『迷藏』と島成園女史の『日ざかり』とである。どちらも同じ程に惹きつけられた中にも、どつちかと言へば『迷藏』(第十室)の方が一層強く私の心をひいた。但し之れは畫中の子供それ自身よりも畫面全體の構圖、子供を中心にして言へば、つまり其の背景が大に與つて居るのかも知れない。兎に角く支那の寺院の伽藍内で三人の子供がかくれんぼをして遊んで居るのである。我國でいふならば、『もういゝよ』と

言つて居る處で、壁の後に隠れて居る二人、兎になつて、片目を手でかくして太い柱の側に立つて居る一人、どつちも實によく其の心持が捉へられて居る。伽藍の大ききから子供の可愛らしさが、伽藍の嚴かさから子供のあどけなさが、心にくい程巧なコントラストを借りて描き出されて居る。そして、いつも私の口癖にいふ子供の眞剣さが、可愛らしさ、無邪氣、といふ様な兒童性と共に充分よく出て居るのが何よりも嬉しい。私は此の畫の前に立ち止つて、三人の子供を交るゝちつと見て居る間に、私は識らずゝ私の頬に浮んで來る微笑を禁ずることが出来なかつた。此の微笑は私が眞實の子供の遊びを、傍でそつと見て居る時に、いつも浮び出る、あの眞實な微笑と同一のものである。實際此の三人の子供は繪の子供でなくて、眞實の子供である。私は此の作を、近年の文展の子供繪中、最も傑出したものゝ一つとして充分に尊敬したい。子供を描く爲に子供を構想しな

いで、子供をそつと眞實のまゝに存して、しかも此立派な全體の構想を立て、ある處が、私の子供繪を観る第一標準に合して居るのである。

そこへ行くと成園女史の『日ざかり』(第五室)は大分畫家の構想で子供を繪に仕立て、ある。それだけに、子供繪としての第一條件の『子供をその眞實のまゝに存して』といふ眞卒さに於て多少缺けて居る。少くも『迷藏』に比してそうである。但し之れは子供繪に對して、餘り嚴格な標準を立てる私に限つての過敏な感じかも知れない。兎に角、巧みな繪である。その巧の中に子供が實に巧みに取扱はれて居る處は、此の作の萬人の感嘆をひく點である。傘屋の店さき(此の一事が既に何といふ巧者な取材であらう)五つの傘がひろげて干してあるのを畫面の中心にして、左には十二三の女の子がもう一本の傘をひろげようとして向ふをむいて立つて居る。其の體つきから足具合、之れが成園女史の名でないにしても、すぐ大阪の女

の子と氣のつくに相違ないあざやかな手法である。右の方には店の上りがまちに腰かけて二人の子、四五歳に二三歳か、姉の方がうとくと居睡つて居ると、弟の方が指をくわへて姉の體に寄り添うて居る。ひろげられた白い傘、向ふをむいて居る女の子、居睡つて居る子、だまつて指をくわへて居る子、全體が、あの眞夏の午後のかあんとした様な、一種の閑寂を實によく描き出して居る子供繪といふ見方からしても、三人の子供にそれ／＼の個性をはつきりと持たせてある處は、同じ作者の従來の子子供繪より格段の進歩といふべきである。たゞ全體の構想の餘りに氣がきいて巧みな爲に、子供の爲に子供を描いたといふよりも、『日ざかり』といふ氣分の一つの巧みな小道具に使はれて居る様の感のするのは免れない。但し、これは強いて嚴密に子供繪として見ようとするからの言ひぐさで、此の作の藝術價それ自身に何の關係のある問題ではない。いづれにせよ、此の畫家が

いつも子供を取扱つて必ず成功して居る處に、吾々としてはなつかしい親しみと、將來の期待を感せずには居られない。

次に、疋田芳沼氏の『小子部』(第七室)と吉田千種女史の『をんごく』(第二十四室)とが、作といふよりも畫題に於て私の興味を惹いた。『小子部』は例の小子部が椽端に腰をおろして、庭の地面に樂書をして遊んで居る多勢の子供を見て居る處である。私はこれが我日本の幼稚園々長の元祖といふべきであると思ふと、いろ／＼のことを考へさせられた。併しこれは美術展覽會とは關係のないことであるから茲には略する。たゞ此の畫を貰ひ受けて、私の幼稚園の主事室に置くことが出来たらと、勝手な、そして慾ばつたことを考へたことだけは、茲に白狀して置く。『をんごく』は大阪の盆の行事の一つで子供が群をして町を練りあるく風習を主材としたものであるが、それを正面から描かないで、その子供の群を店の格子戸の中から一人

の娘が眺めて居る處を描いた處に此の作の趣向がある。後ろ向きの大阪娘を大きく描いて、大阪の盆の町の氣分を却てよく浮き出させた手際は敬服すべきものである。子供の描寫が少しも主になつて居ないのであるから、子供繪として特に注意すべきものではないかも知れないが。子供を大きく描かないで、兒童生活の一つの味を巧に出して居る處に、子供繪としても一種の面白味があるといへる。

西洋畫の方では龜高ふみ子女史の『ダニエルの話』(第十五室)と新井完氏の『驢』(第十六室)とが目につく。『ダニエルの話』は聖書掛圖を後ろに三人の女の子が長椅子に並んで腰をかけて居る處で、三人とも年齢相應な氣分の違ひが一通り描き分けられて居る。たゞ私の勝手な感じをいふならば、三人とも其の表情が、聽いて居る表情といふよりも、視て居る表情になつて居る様な處がないでもない。といふと言葉が強過ぎるが、つまり、

耳よりも目が、しかも其の目が、お話を聴いて居るよりも何か實物を見て居る風のある處が、この畫題として措しいことと思ふ。殊に白がすりを着た一番年長の子の目がそうである。但し、これは随分無理な注文なのかも知れない。『驢』は敢て子供を主にした繪ではないが、驢をひいて立つて居るあの赤服の支那兒童の、うつとりとした様な、げかんとした様な處に、いふにはれぬ面白味がある。こういう點も亦確に兒童性の一つとして存する處で、そこを何の巧みもなく、超然とした筆つきで描いてあるのが至極嬉しい。

彫刻では、建島大夢氏の『滿二つ』と北村西望氏の『將軍の孫』とが、子供を主題にした二つであつていづれも實に傑出した作品である。腹掛け一つでよろ／＼と歩いて居る、おかつばさんの女の子。これが滿二歳で、シャツ一つにお祖父様の大きな長靴を足一ぱいに股迄穿いて、大將らしく擧手の禮をして笑つて居る男の子。これが將軍の孫である。私は此二つを見て、つく／＼思つた。子供は繪によりは彫刻に向く主題かも知れないと。實際

子供の身體及び其の心持ちの大切な特色である。まるみといふものを、此の二つの彫刻に出て居る程、繪に於て出すことは六かしいとに相違ない。それにしても此のまるみ、やはらかな面のふくらみ總ての部分の動き。何とよく出來て居ることであらう。子供繪が、どうしても概念的になり易い處を、此二つの彫刻が、しつかり個體的になつて居るのも何といふ立派なことであらう。

### ○今年夏期の文部省主催保姆講習會へ出席せられた方々へ

夏季の文部省主催保姆講習會へ出席せられた方々には、粘土製作實習の講師として新海竹太郎氏の温容と、堀進二氏のあの製作に熱心なる態度とは今尚ほ眼底に新たることと思ひます。今年の文展の彫刻室に場を壓して立つて居る大傑作の中に、新海氏の『金平化物退治』と堀氏の『支柱』及び『老人』とがあります。『金平化物退治』は、あの昔物語の傳説から題をとられたもので、筋肉逞しき勇猛の偉丈夫が、化物の首筋むづと握つて立つて居る處。『支柱』は男と女と二人並び立つて頭の上の大きな重い岩をさへへて居る處。いづれも、強さ、意力、といふことを主にしたものです。又『老人』は老齡の人の極めて平和安静な心持ちを、あらはして居るものであります。新海氏のは審査員の出品として、更めて讃辭の呈し様もありますが、堀氏の此の傑作が名譽ある特選になつたことは、親しく同氏の實習を受けた方々と共に、大に祝賀したいと思ふのであります。(倉橋生)